

京都の庭／文化の礎／知識の床

私たちはこの場所の100年前を、資料館に所蔵されていた古地図で振り返ってみました100年前からずっと緑のまま変わらない貴重な場所であることがわかりました。私たちは、この貴重な場所が、100年経っても変わらない環境でありつづける、京都の新しい庭をつくりたい。そして、100年後、この建物に京都の歴史が集積されることで、文化の新しい礎になることを想像します。

大学生や府民だけでなく、この資料館を訪れる全ての人が、京都の情報を心地良く得られるような新しい知識の床をもった建築を提案します。

■未来の歴史としての庭

100年前の敷地周辺は一面水田と桑畑が広がっていました。80年前に、下鴨中通を挟んだエリアが住宅地として区画整理されます。そして40年前には、現資料館も建設され周辺は住宅地に開発されます。しかし、この敷地だけは植物園と同様に、ずっと緑地であり続けました。そこで、私たちは今後も、100年以上この場所を新しい緑の庭として未来へ継承することを提案します。



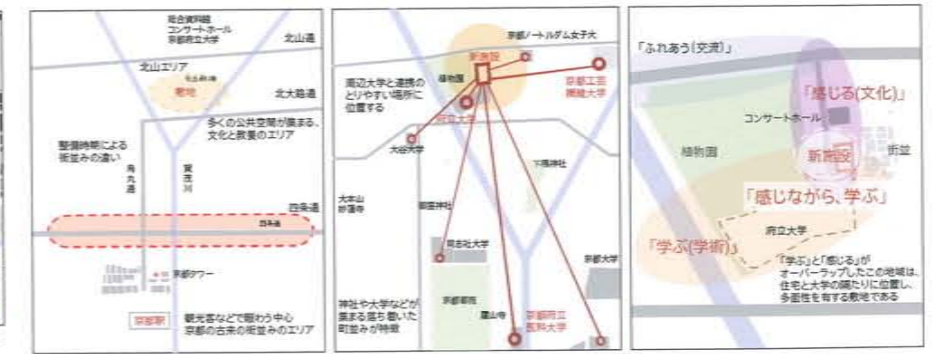
1912年

1929年

1935年

1995年

2111年



a. 京都における位置づけ

北山地域は市街地とは異なり、公共施設と住宅地が隣接する閑静なエリアです。また賀茂川に挟まれ、植物園から嵐山まで一帯である、静かな場所に位置します。大きな緑の帯のエリアとして、府民に憩いややすらぎの場を提供したいと考えます。

b. 北山周辺地域における位置づけ

連携する3大学をはじめ、同志大学と京都の高級文化施設群との新たな連携を強化する場として重要なエリアです。エリアイメージの「感じる」「学ぶ」が揃った敷地は、府立植物園との連携を図りつつ、連携で楽しみのある落ち着いた施設が望ましいと考えます。

c. 新施設のエリアイメージ

涼静で「感じるから、学べる」場である新施設は、京文化・歴史の継承・保存・継承する拠点として、国内外に開かれた空間である必要があります。人々が心地よく、やすらぎの場として、京都の情報の川に繋がる京都の川を繋ぐ場が広がった庭をつくりたい。

基本理念

1. 都を感じながら、個々の探求を深めることができる、国内外に開かれた新しい「京都の庭」
2. 京都の歴史・文化資料の集積の場として、様々な人が集う京都らしい「文化の礎」
3. 京都研究の啓発・普及・支援活動の拠点として、また府民の交流拠点としての「知識の床」

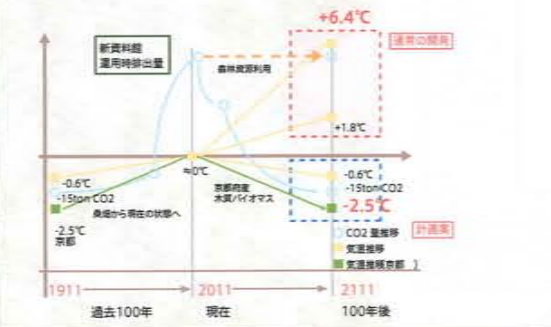
■文化としての庭

近隣の住宅地に緑地が少ないのは、少子高齢化社会において、落ち葉掃除などの維持管理費の不安が要因です。皆が気持ち良いと求める植生の実現には、数十年から数百年かかるといわれています。京都の庭が、いつも美しい「ありよう」を示してきたように、この建物の緑もプライベートな「庭」として、手入れの行き届いた新しい文化になります。



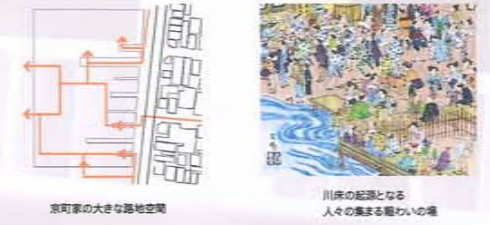
■環境先進地としての庭

100年前の桑畑が広がる環境から、現在に至るまで、京都は2.5の温度上昇したと言われています。それを建設時から、100年かけて、100年前と同じ環境にしたいと考えます。また、屋上緑化、京都府産木質バイオマスといった森林資源利用、自然エネルギー利用、により温度上昇に影響のないレベルまで、CO2を削減します。このスキームの効果により、100年後にはカーボンマイナスを実現します。敷地一帯を庭として新しく緑にすることによって「環境共都市・京都」にふさわしい、先駆的、先導的なシンボリックな場所になると考えます。



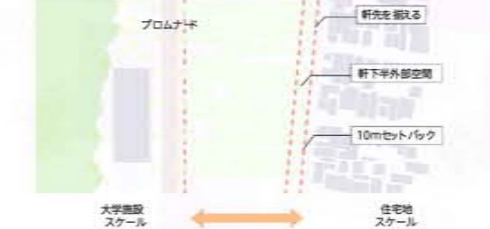
■分節された見え隠れの場

走り廊、通り裏の路地のような分節された空間は、教養教育共同化施設、植物園の利用者、その他府民が集い、憩い、交流することを誘発するアプローチになります。また、大・小さまざまな庭を設けることによる、京町家としての明るく、落ち着いた学習環境を形成しています。



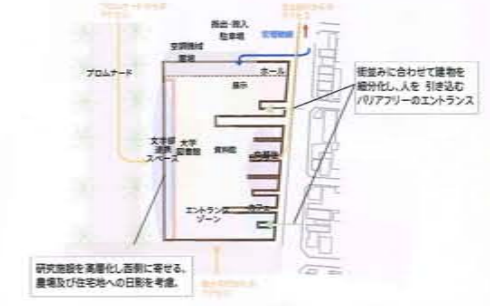
■街並みに馴染むファサード

東側住宅地の良好な住環境に配慮し、通りから10m程度セットバックして揃えた平屋の軒先空間は、街の小さいスケールに馴染みながら、ポケットパークのような府民が立ち寄りやすい環境をつくります。それは、イベント時・災害時にも利用可能なゆとりのある半外部空間にします。また、体の不自由な方等が、年齢を問わず快適に利用できるように、下階中道の線を引き込みながら、住宅地からプロムナードまで段差のない床で施設の大部分を1階に集約しました。



■清楚な佇まいのL字建築

低層部分のスケールと対比するように、研究棟は薄い奥行きにすることで、キャンパスプロムナードの軸線を強調しつつ、農場及び住宅地への日影の影響、山並みの景観へ配慮しています。長いボリュームの所々に門を開けることで、比叡山の山並みへの視線の抜けをつくり、プロムナードからの象徴的な玄関となります。L字型の断面をした建物の全ての部屋から、比叡山を借景にした大きな庭が眺められ、居心地の良い研究棟になります。





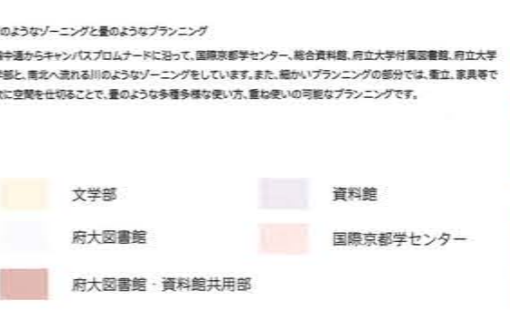
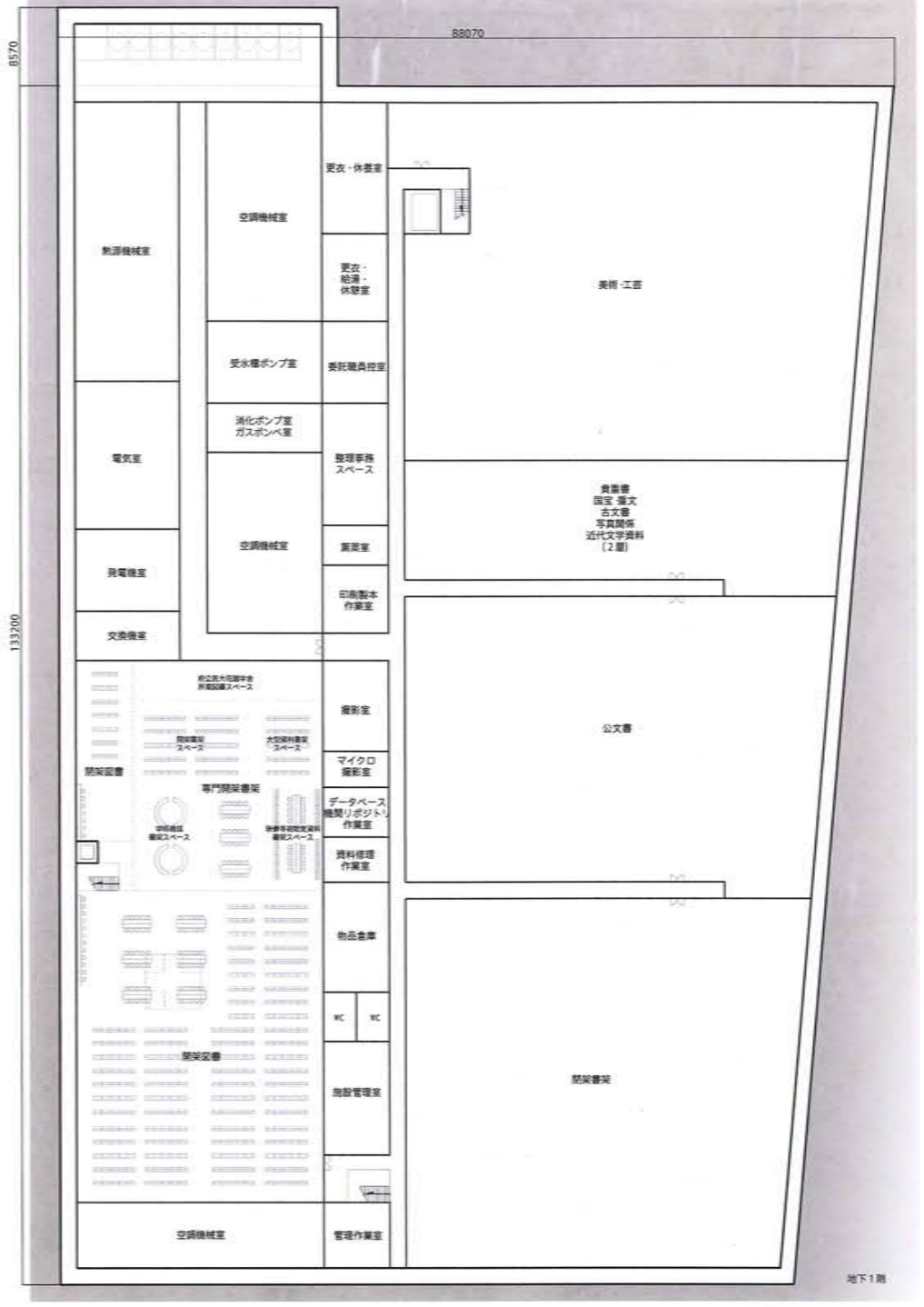
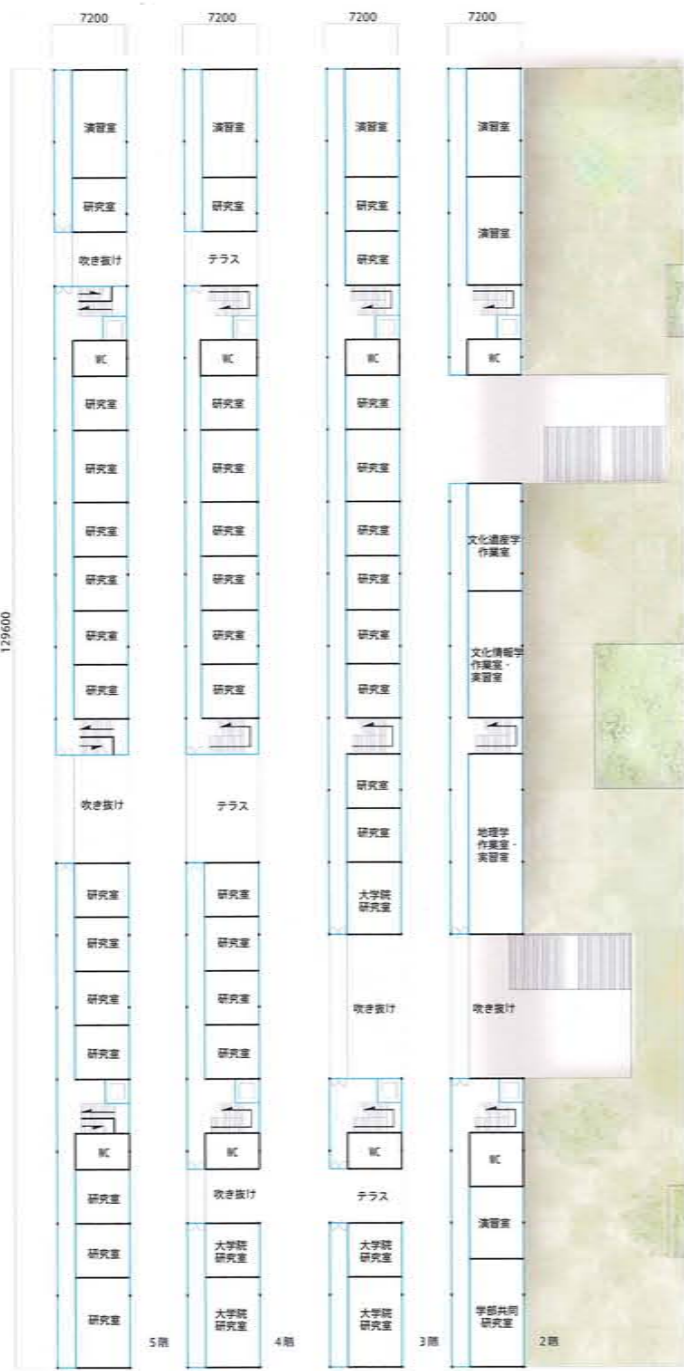
暖色 照らされている書庫で異なる資料館の資料も視覚的に活用できる為の、開放スペースの量むき

北山から南に抜ける歩行者専用歩道の広さのブロードな歩道を歩いた際の爽やかな印象

新たな利用ニーズへの対応や情報機器の更新などにフレキシブルに対応できる空間をつくる床地

大学生から市民まで、和時や読書、落ち着いた時間を過ごす、カフェテリアなどのオープンスペース

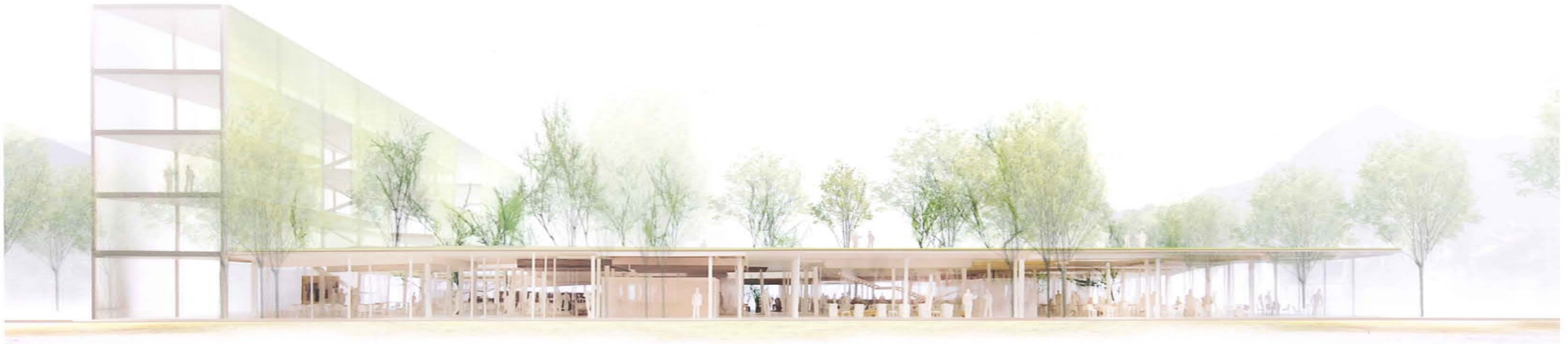
天井吊りのグラデーションと柱の不同高さで生み、総合資料館と府立大学図書館の一部のある建築



川のようなゾーニングと畳のようなプランニング
下輪中環からキャンパスプロムナードに沿って、国際京都学センター、総合資料館、府立大学付属図書館、府立大学文学部と、南北へ流れる川のようなゾーニングをしています。また、細かいプランニングの部分では、畳立、家具等で柔軟に空間を仕切ることで、畳のような多様な使い方、重ね使いの可能なプランニングです。

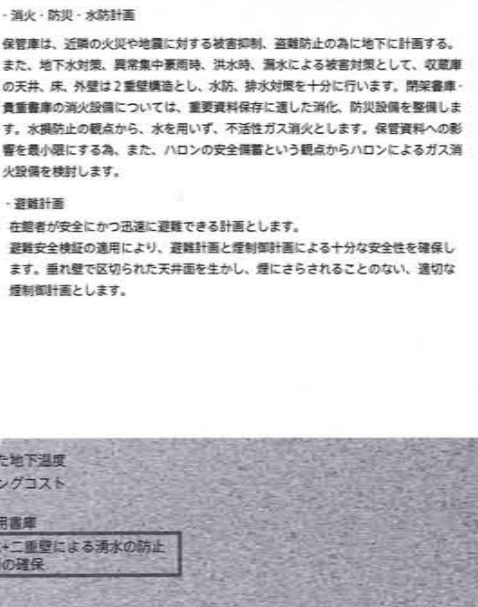
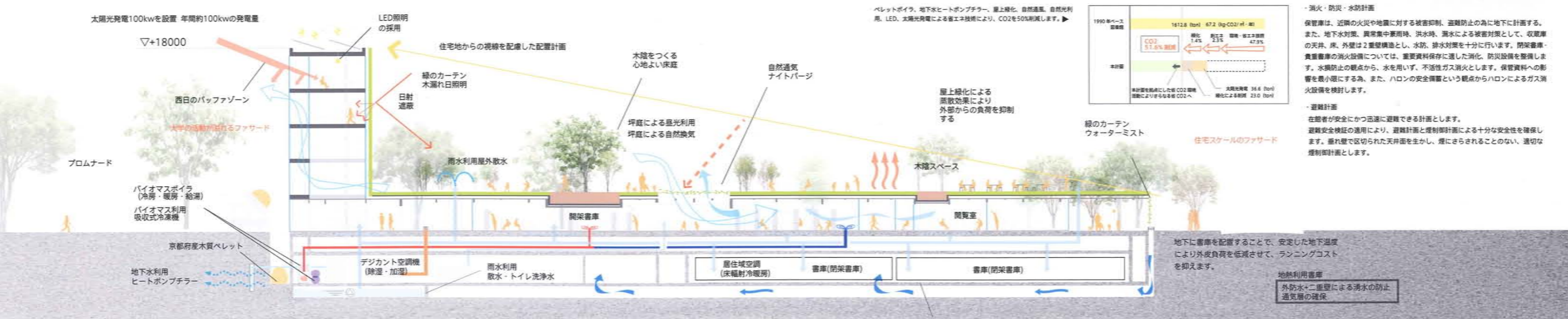
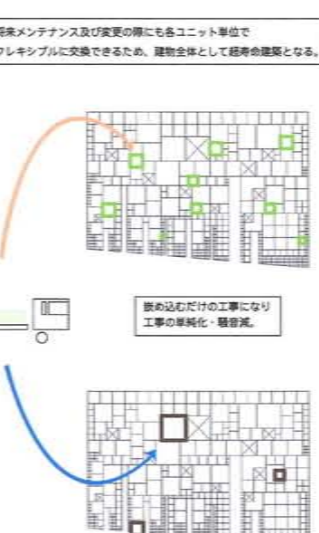
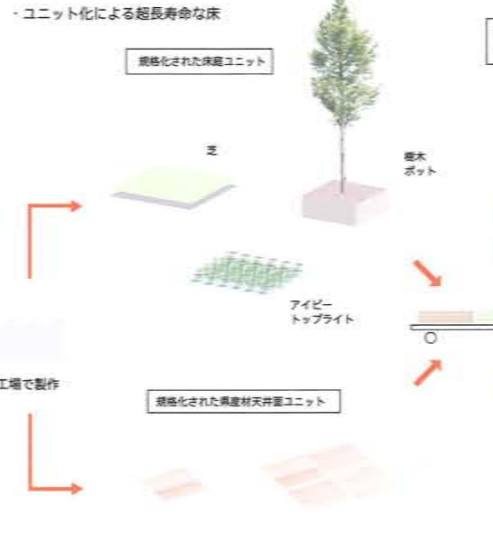
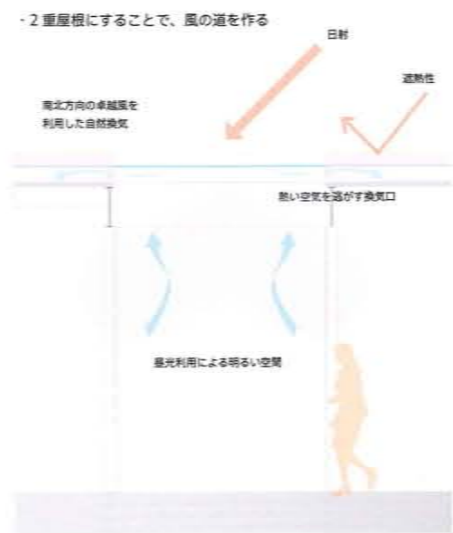
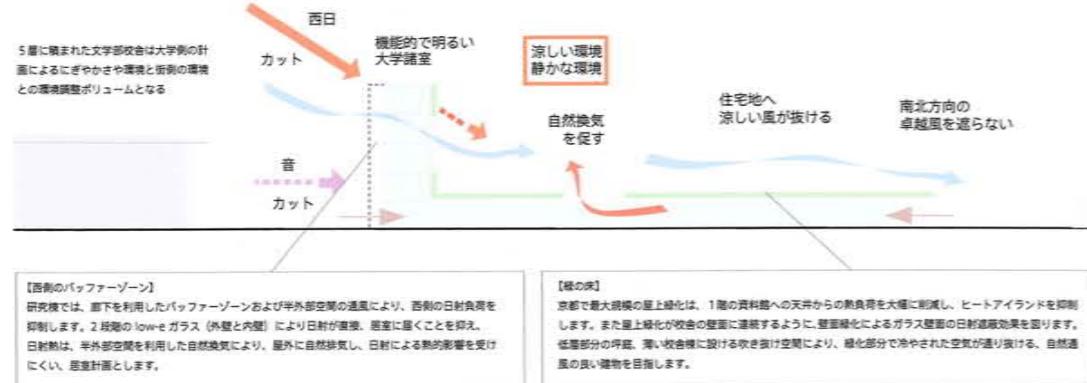
各階平面図 S=1:500

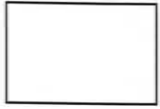
地下1階



■環境調整装置としての床 ~川床や京町家に学んだ自然空調と自然採光~

川床や京町家に学んだ五感による自然空調を目指します。緑や比叡山を眺め、風を感じることで、自然を眼と身体で感じ、機械に頼らない省エネルギーで気持ちのよい環境を作ります。「京の知恵」と「京の森」を最大限に利用することでエネルギー消費量およびCO2排出量の50%削減を目指します。建物配置計画も年間を通した卓越風である北風、夏の昼間に多い南風に対しても影響の少ない配置としています。また、間伐材を利用した木質パレットを空調熱源として採用するなど、森林資源の有効活用を目指します。京都らしい知恵と工夫、府産木材の利用により、CASBEE京都によるSランクを実現します。

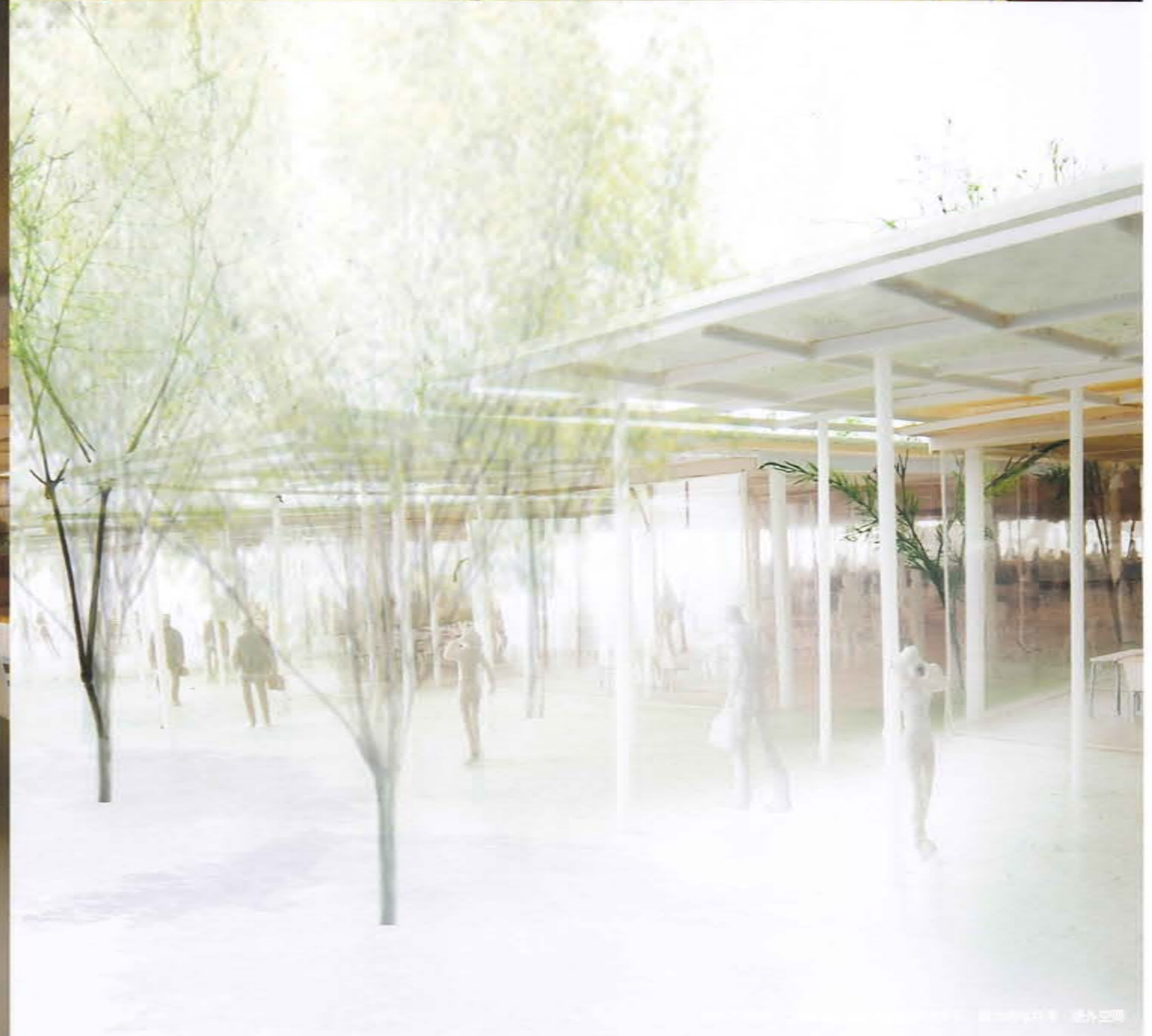




研究棟からの眺望。一面に広がる緑のほかに知的な佇まいを演出し、遠景による比叡山の取り込む「見せかた」



平層の建物の開放感と柔軟性のある空間と、柱と梁の構成による新しい「京都らしさ」



研究棟からの眺望。一面に広がる緑のほかに知的な佇まいを演出し、遠景による比叡山の取り込む「見せかた」